

「新しい構造物問題に」 「歴史ある町並み魅力」 「面白いだけでは無意味」

函館の景観を考えるシンポジウム
歴史的景観が危ない!!



シンポジウムには元町画廊経営の小原雅夫さん、函館観光ボランテニア「二會の会」の佐藤喜久恵会長、旧相馬邸館長の東出伸司さん、全国町並み保存連盟理事で小樽再生フォーラム代表の篠崎恒夫さんが参加。初めに落合会長が「市が1988年に市西部地区歴史的景観条例を制定し、歴史的景観は守られると思っただけが、現在は建物がなくなるばかりか、新しい構造物といった、これまでになかった問題が発生している。文化の日(3日)にこのような討論をするのは有意義」とあいさつした。

小原さんは「古い町並みに景観問題について意見が発表されたシンポジウム

西部地区のあるべき姿とは

函館市西部地区で、景観形成指定建築物や伝統的建造物の維持、保全が困難となり、解体される建物が増えるなどの現状を踏まえ、景観問題を考えるシンポジウム「歴史的景観があふない!!」(函館の歴史的風土を守る会主催)が3日、道教育大

観・ポ 景シ

函館校で開かれた。市民や学生ら約80人が参加。街づくりの分野で活躍する4人が意見を述べ、西部地区の歴史的景観の価値を再認識した。

(山崎純一)

は、人々の生活により刻まれた歴史があり、それが魅力。その中に異質なものがあれば違和感を覚える」佐藤さんも「函館は多くの物語がある街として観光客を引き寄せている。面白いだけで、心に残らないものは、ここにある意味はないのでは」と話した。

東出さんは旧相馬邸館長となった経緯を紹介し「函館の恩人である相馬哲平氏の建物を見捨てることはできない」と話した。篠崎さんは小樽で発

生しているマンション建設問題を挙げ、「市民運動の影が薄くなっているが、函館は運動が」進んでいると思う」と話した。

参加した60代の女性は「先人が作った街並みや風土に感動しながら函館に住んでおり、守りたい気持ちはあるが、現代の人にとっては関係ないのかもしれない。改めて市民に函館の良さを知ってもらうことが大切と感じた」と話していた。